

紅頭嶼発見の石器及び土俗資料 (1947) ※

国 分 直 一

Stone implements and ethnological objects found in Batel-Tobago Island, 1947.

By

Naoichi KOKUBU

The small coral island of Batel-Tobago, exclusively inhabited by the Yami, has an area of about 45 square miles and lies between Formosa and the Philippines closer to the former, at a distance of 45 miles off the S. E. coast of Formosa.

The Yami is one of the few tribes in South Eastern Asia who have still the faint memory that their fore-fathers used stone implements in ancient times.

They appear to have used iron tools for the purpose of woodwork for many generations, but until the Japanese occupied the island some 60 years ago they were apparently accustomed to use stone-headed implements for agricultural purposes. The use of stone implements is now entirely superseded by iron tools, but some of the objects are still preserved as hereditary treasures among them.

The circumstances that the population is very small, and that the people are very generous, enabled some energetic collectors like Dr. Kano and his men to gather the specimens almost entirely in these several ten years.

So it was very lucky that the present author could gather some of these rather rare remnants on the occasion of his expedition in the Summer of 1947.

Following illustrations were intended to show those remnants, among which the author can point out some specimens never referred to in previous reports.

(一)

台湾の東南海上バシー海峽に浮かぶ小島、紅頭嶼は面積僅かに3万里の小島である。地質構成は主として第三紀中の海底火山及びその噴出にかかる多量の火山噴出物によるものであつて、その後の土地の隆起によつて、今日の紅頭嶼が完成したと考えられている。全島殆んど山岳から成り、平野に乏しく、中央から少しく西北に偏在して、島間の最高点海拔1807尺の紅頭山 (Dzipigagun) がある。第2の高峯は大森山 (Dzikomaimoron) で、全島の南端にある。全島火山島であるために至る所断崖絶壁をなしているが、海岸線は比較的単調で殊に北部の一面は殆んど一直線をなしている。港湾の見るべきものは Imurud 湾と Iwaginu 湾があるに過ぎない。平地は山岳と海岸線に挟まれた頗る狭隘な地域で各所に点在し、湧水のある場所を中心にしてヤミ族の集落が営まれている。このヤミ族は同島が他に隔絶した洋上の孤島であり、

※水産講習所研究業績 第207号

その他種々の原因によつて、孤島的に保たれてきたために原始的に保存され、人類学的研究に興味ある資料を維持してきている。

同島発見の先史学的資料については、従来同島を精力的に長時間にわたつて精査した鹿野忠雄博士をはじめとして諸研究者によつて屢々注目する所となつてきた。又台北帝国大学時代は土俗学教室に採集されている資料の如く未発表の資料もある。終戦後1947年夏、この島の学術的調査が主として中国系学者を中心として行われた時、筆者は金関丈夫教授とともにこれに参加し新資料を得ることが出来た。

従来同島発見の先史学的資料について注目されたものは大部分が石器である。稲葉直通、瀬川孝吉両氏共著の日本の南端紅頭嶼によると、石器は三宅驥一氏が採集されたものが、紹介された最初のものであろうといわれる。

学術的には鹿野忠雄博士の「紅頭嶼に発見される石器に就いて」(史前学雑誌 第2巻 第3号、1930)が最初の発表であろう。その後にはける主要文献をかかげれば次の如くである。

金子富雄；「台湾紅頭嶼イモロルの打製石斧」(史前学雑誌 7巻1号、1935)

E. R. Leach; Stone implements from Botel Tobago Island, (Man. XXXVIII, P. 189—209, 1938)

鹿野忠雄；「紅頭嶼発見の甕棺」(人類学雑誌56巻 3号、1941)

鹿野忠雄；「紅頭嶼の石器とヤミ族」(人類学雑誌57巻 2号、1942)

(二)

終戦後、1947年夏、中国系の学者を中心として、残留日本人学者が参加して、動物学、植物学、地質学等の研究に加えて人類学的調査が行われた際、筆者は先史学的資料の採集につとめた。その結果若干の興味ある新資料を得ることが出来た。但し資料はヤミ族が伝来品として保存していたもの及び表面採集によるものである。以下資料について記載する。

(1) 打製石斧 ヤミ族の所謂 Chichivchiv-no-Inapo. (Plate I, Fig.1,2)

Iraralai 社に於いて採集、住居内に保存されていたもの。両側に打ち欠きを加えられて島田髻式の形式を示している。

石材は海辺に豊富にある表面の磨蝕された自然礫を打ち割り、片面は自然礫を利用し、片面はほぼ平板になるまで打ち欠き、荒い打ち欠き面をそのままとどめている。側部の打ち欠き方によつて典型的な島田髻式のものともなれば、有肩形式のものともなる。この形式の石斧は従来はこの島の南岸に発見されると考えられていたが、北岸にも発見されることが明かになつたわけである。尙この形式の石斧は火烧島、台湾本島西海岸恒春半島に近く位置する小琉球嶼に於いて発見されている。

実測値をあげる。実測に当つては縦は器軸の中央部を、幅は最広部を、厚さは断面図作成部の最厚部を測る。以下実測はすべて以上の方法による。

Fig.	縦	幅	厚	石 質
1	13.7cm	8.9cm	3cm	安山岩
2	13.0cm	8.8cm	2.7cm	同 上

(2) 磨製石斧 ヤミ族の所謂 Wasai-no-Inapo。(Plate I, Fig. 3,4)

Iraralai 社に於いて採集，住居内に保存されていたもの。Fig.3 標品はやや片刃に近い形式を示しているが，Fig.4 標品は両刃形式を示している。石質はやや軟質の緻密な質である。

Fig.	縦	幅	厚	石質
3	6.3cm	3.5cm	1.1cm	石灰岩
4	9.9cm	4.7cm	2.0cm	同上

(3) 粗造石器 (Plate I, Fig. 5)

Iraralai 社に於いて採集，住居内に保存されていたもの。海辺に見られるやや扁平の自然礫を打ち割つたのみで，何ら他に加工していない。打ち割つた際に生じた尖鋭な刃縁を利用したと思われる。ヤミ族はこの標品も Wasai-no-Inapo とよんでいた。

Fig. 5 : 縦—9.5cm 幅—9cm 厚—2.2cm 石質 玄武岩。

(4) 石錘 (Plate I, Fig. 6)

Imourud 社のやや東方，大森山の西南麓海岸に赤褐色土器片——無文にして，現在のヤミ族が使用している土器と器質は酷似している——を包含する地点がある。鹿野忠雄博士によると Imororud 社には先住地についての口碑があり，次のように伝えているという。

「今より16代前には現在の Imurud 社はなく，より東方の地に Imashik 社とよばれる蕃社があり，現在の Imurud 社の地には Minashiron とよぶ蕃社があり，其の共同墓地は現在の Imororud 社内の海岸よりの地点であつたと。」

上述の土器包含地はこの Imashik 社の遺跡であると見てよいかも知れない。然し実地の踏査を行う時間がなかつたために確かめることが出来なかつた。

Fig. 6 標品は上述の土器包含地に於いて，同行の金子寿衛氏が採集せるもの。

全長—11.8cm 幅—6.3cm 厚—3.2cm 重量—300gr 石質 安山岩

(5) 石環 ヤミ族の所謂 Mirupi-no-Inapo。(Plate II, Fig.7,8)

Iraralai 社に於いて採集せるもの。住居内に保存されていたもの。緑色の軟玉製品である。2例あるが全く同じ大きさを示している。

同一の管状穿截器によつて製作されたものと思われる。石環は移川子之蔵博士らの採集された1例と合して3例がこれまでに得られたすべてである。新採集石環の外側の一部には浮き出しの装飾がありX状の陰刻がある。同様の標品を鹿野忠雄博士は火焼島油仔湖遺跡に於いて1例採集している。「台湾東海岸に於ける先史学的予察」(人類学雑誌 57巻 1号)に図示している。先史時代の火焼島油仔湖地方と江頭嶼北岸住民との間に連絡交渉のあつたことを語るものであろう。

Fig.	環孔	環身の幅	環身の厚	重量	石質
7	5.6cm	0.9cm	0.4cm	21gr.	ネフライト
8	5.6cm	0.9cm	0.4cm	21gr.	同上

(6) 角附玦状耳飾 ヤミ族の所謂 Patotobisun-no-Inapo。(Plate II, Fig. 9,10,11)

Iraralai 社にて採集。住居内に保存されていたもの。同社の長老 Shyamankeiyan をはじ

め社人たちは「カナタダオがもつていつたのでこれは最後のものだ」といつていた。同様のものは台湾大学に移川子之藏博士採集のもの6例がある。何れも緑色の軟玉製品である。

Fig.	環 孔	環身の厚	環身の幅	重 量	石 質
9	2cm	0.3cm	0.5cm	3gr.	ネフライト
10	2cm	0.4cm	0.6cm	3gr.	同 上
11	1.9cm	0.35cm	0.4cm	3gr.	同 上

角附玦状耳飾は環の一部に開口部が加工されているが、Fig.11 標品には開口部がない。

(7) 石製円盤 ヤミ族の所謂 Pachinokun-no-Inapo. (Plate II, Fig. 12,13,14,15,16)

Iraralai 社にて採集。伝来品として保存されていたもの。管状穿截器で穿截したものの。

2例 (Fig. 12,13) は石質は軟玉、上下両側面から穿截した状況を周縁に留めている。

2例 (Fig. 12,13) は上下両側面から穿截した状況を周縁に留めている。他の3例は周縁部はよく磨かれて、穿截時の痕跡をとどめていない。ヤミ族はこの種のことを貴金属を計量する秤の分銅として用いてきたとしている。この種の小円盤は火烧烏油仔湖遺跡から発見されているし、台湾本島の遺跡からも発見されている。

Fig.	直 径	厚	重 量	石 質
12	2.5cm	0.5cm	7gr.	石英片岩
13	2.2cm	0.5cm	5gr.	同 上
14	4.0cm	1.2cm	32.5gr.	大理石
15	1.3cm	1.2cm	9.5gr.	石灰岩
16	2.1cm	0.9cm	4.5gr.	同 上

(8) Raditan (Plate II, Fig. 17,18,19,20,21)

Iranumilk 社にて採集。伝来品として保存されていたもの、Raditan とよばれていた。

Iraralai社では秤の分銅は Pachinokun-no-Inapo とよんでいたが、一般にヤミ族は秤の分銅を Raditan とよんでいることは鹿野忠雄、瀬川孝吉両氏の An illustrated Ethnography of Formosan Aborigines Vol. I. The Yami. に於いて明かにされているので、Fig. 17—22の未加工の小自然礫も秤の分銅として使用されたものであろう。

Fig.	全 長	重 量	石 質
17	5.4cm	23 gr.	石灰岩
18	4.4cm	17.5 gr.	斑 斕 岩
19	2.0cm	3.0 gr.	同 上
20	3.7cm	7.0 gr.	同 上
21	2.0cm	3.0 gr.	同 上

(9) Raditan (Plate II, Fig. 23)

Iranumilk 社で採集。婦人が一種の charm として所蔵していたもの。Raditan とよばれていた。秤の分銅を一般に Raditan とよばれていることを上述したが、この石を所蔵していた婦人は Raditan は「硬い石」という意味だといっていた。

Fig. 22: 全長—5.0cm 重量—37gr. 石質—斑斕岩。

(10) 石製紡錘車 ヤミ族の所謂 Susunrun. (Plate III, Fig. 23)

Iraralai 社に於いて採集。伝来品として保存されていたもの。柄は竹管を利用している。ヤミ族の婦人は紡錘車を用いてラミ即ち China grass から糸を紡ぐのであるが、普通には土製品を紡錘車として使用している。現行のものとしては石製品は見当たらない。

Fig. 23: 直径—6.9cm 厚—2cm 重量—15gr. 石質—安山岩。

(11) 打銀用石床 (石床は Stone anvil) (Plate III, Fig. 24)

Iraralai 社に於いて採集、伝来品として保存されていたもの。ヤミ族は銀を愛好し、銀を打延して板金とする技術に長じている。Fig. 24 標品は anvil として用いるに適当な堅硬な石質の長目の自然礫をえらんで利用したと思われるもの。形を調整するための加工の跡を留めていない。この種の標品は上引の鹿野、瀬川両氏の著書中にも登場していない。

Fig. 24: 全長—27.2cm 幅—7cm 厚—4.8cm 重量—1,587gr. 石質—斑斕岩。

(12) 石槌 (Plate IV, Fig. 25)

Yayu 社に於いて同行の金子寿衛男氏によって採集されたもの。石質は安山岩、金子氏はこの石槌をヤミ族の住居の前庭に於いて発見したという。彼らはこの種の石槌を用いて Pandanus の種子を潰して食していたという。

金子氏によると、ある程度の窪みが出来ると、他の新しい面を使用し、前、背、両側の四方に窪みが出来るとそれを捨て他の新鮮な礫を石槌として使用するのだという。

この観察は先史遺跡に於いて屢々発見されている同様の石槌と考えられる石器の用途を考える上に興味深い示唆を与えるものといえよう。

Fig. 25: 全長—26cm 厚—11.4cm 重量—2445gr. 石質—安山岩。

(13) 破砕面を利用せる石器 (Plate IV, Fig. 26)

滞島中 Ivarinu 社海辺で数人のヤミ族男子が漁獲せる魚の鱗を落とす作業を見た。かれらは彼等の大舟 (Chinurikran) で漁撈を終えて海岸に帰着するや否や、海辺に豊富にある安山岩礫の一片を拾って、破砕し、その破砕面を利用して魚鱗を落していた。Fig. 26 標品は金関丈夫博士がその際採集された一例を図示したもの。台湾本島の海辺の先史遺跡に於いて屢々豊富に発見される尖鋭な破砕面を留めた礫器の用途を考える上に参考になると思う。

Fig. 26: 全長—9.1cm 重量—200gr. 石質—安山岩。

(三)

以上は採集資料を中心として記載したものであるが、尙観察したことで先史学上の参考になると思われる事項について附記しておきたい。

(1) 石製動物像

以上の諸資料の外に Iranumiruk 社にて社人の所蔵する石製の蟹と人形像を見た。前者は体長約20cm、後者は身長約30cm比較的写実的な彫法を示しているが粗朴な作品である。この

人形石像から連想されるのは Maori 族の Kumara-god である。Elsdon Best 氏は Maori agriculture. (The Journal of the Polynesian society. No. 157, 1931) に Kumara-god の写真をかかげて、次のように説明している。

At the time of working in the field the image was displayed there as a taumata atua (resting-place for the deity) and removed when the crop was lifted.

尚フィリッピン ルソンの Igorot 族の間には anito 像がある。筆者にとって紅頭嶼調査の最後の機会と考えられる1947年夏の調査時に、Iranumiruk 社の動物石像をフィリッピンやポリネシアに於ける人形石像との関係に於いて考えるためにも、なぜ詳細に調査しておかなかつたかと後悔されるのである。

紅頭嶼調査後、帰途、火焼島を調査した際、同島島民から、同島西岸の組合石棺の発見されると伝えられる地域から、人形もしくは動物石像が発見されたという話をきいた。両島が過去に於いて深い関係をもつていたことを語っているようである。

(2) 屋根型斧と Uma.

ここに屋根型斧というのは Heine Geldern 博士の所謂 Dachformige Beil に当るもの。即ち断面屋根形を示すものである。この形式の玄武岩製大形磨製鑿形石斧1例が移川子之藏博士らによつて採集され、台湾大学考古人類学教室に所蔵されている。然してこの屋根型斧は現行の Uma とよばれる鉄製鑿に器形が酷似するのである。現行の鉄製 Uma が先史時代の石製 Uma の形式をそのままに留めている点に深い興味を覚えたので、採集した鉄製 Uma (木製柄附)と台湾大学所蔵の石製 Uma とをならべてかかげておく。Uma は造船、建築等の木工用工具である。(Plate V, Fig. 1)

(3) 戦争と鉄器の増加

今次大戦の末期、艦船の破砕物の漂着が多く、このためにヤミ族は豊富な鉄材を入手した。錠孔を留めたままの鉄製斧 (Wasai) を使用しているものもあつた。(Plate V, Fig. 2) 飛行機の翼で鶏小屋の屋根をふいているものもあつた。

然しながら鉄材急増の事情は一時的に過ぎない。原始的な漁撈、タロ芋及び僅少な粟作によつてささえられる孤絶した海島であるという事情は依然として支配的である。

以上の図版中 Plate V 所載の図は台湾大学考古人類学教室の陳奇祿講師をわづらわしたものである。

PLATE

PLATE I

Fig. 1,2. Stone implements called "Chichivchiv-no-Inapo" from Iraralai.

Fig. 3,4. Stone implements-quadrangular axes-called "Wasai-no-Inapo" from ibid.

Fig. 5. Crude stone implement called "Wasai-no-Inapo" from ibid.

Fig. 6. Stone sinker from the prehistoric site near Imurud.

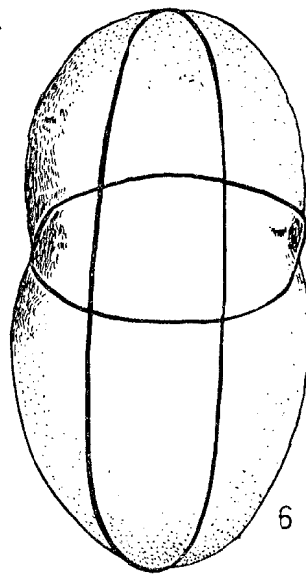
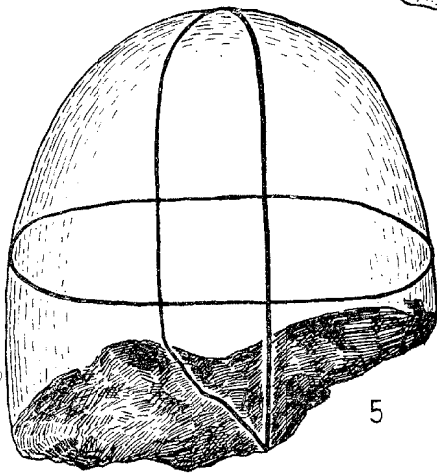
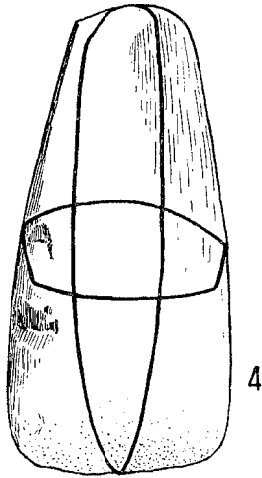
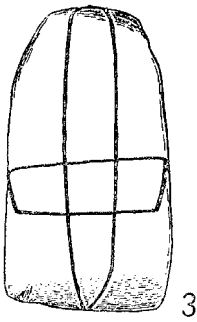
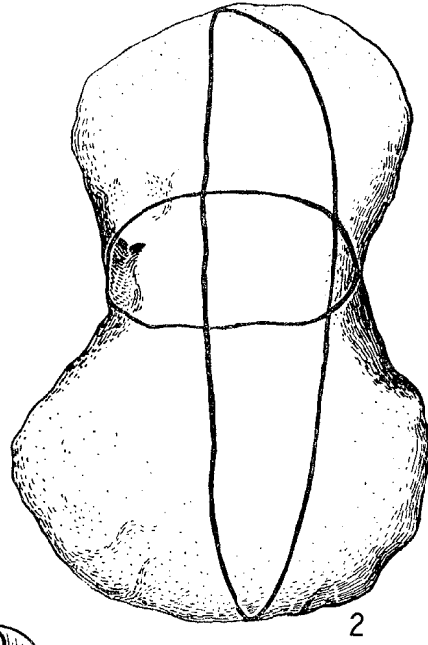
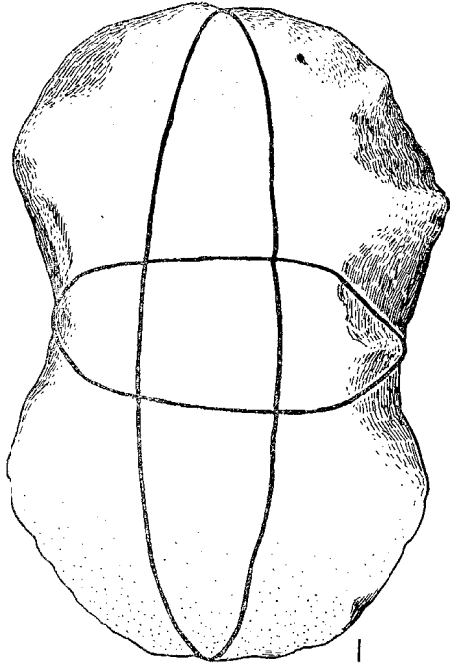


PLATE II

Fig. 7, 8 Bracelets of green stone called "Miwpi-no-Inapo" from Iraralai.

Fig. 9, 10, 11. Ear-rings of nephrite called "Patotobisun-no-Inapo" from ibid.

Fig. 12, 13, 14, 15, 16. Stone disks called "Pachinokun-no-Inapo" from ibid.

Fig. 17, 18, 19, 20, 21. Stone weights called "Raditan" from ibid.

Fig. 22. Claw shaped stone object from Iranumilk.

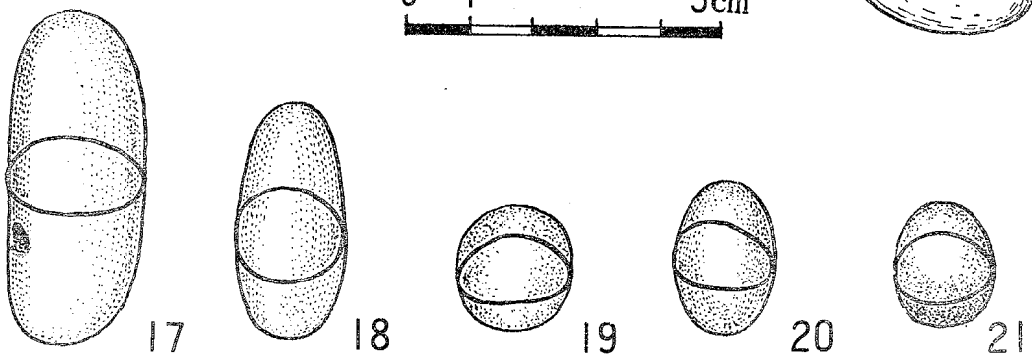
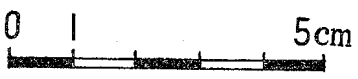
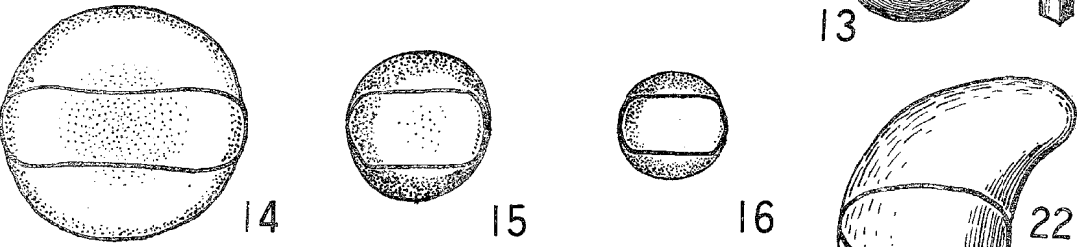
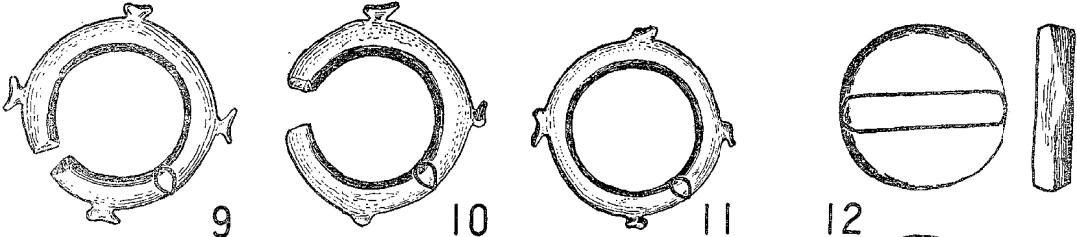
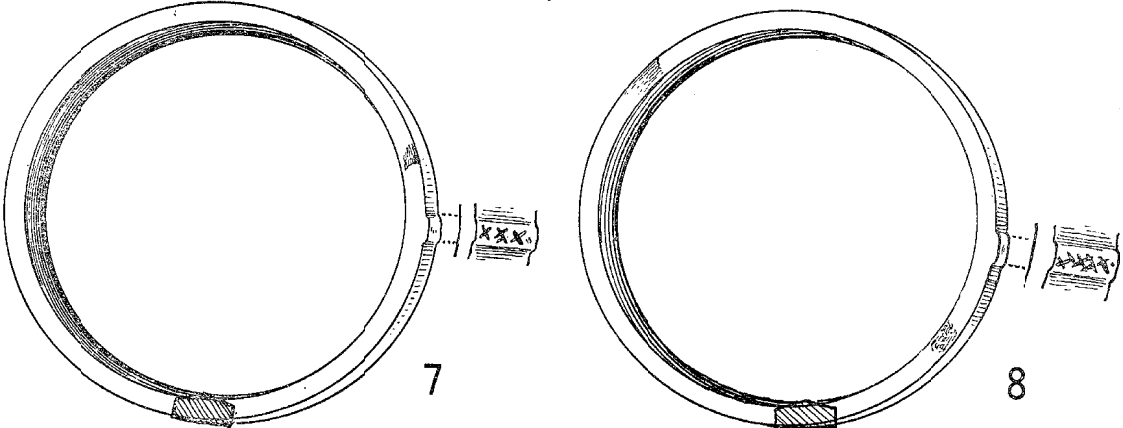


PLATE III

Fig. 23. Stone spinning whorl called "Susurun" from Iralalai.

Fig. 24. Stone anvil called "Raditan" from ibid.

PLATE IV

Fig. 25. Stone hammer called "Pitatangan" found on the yard of a Yami residence.

Fig. 26. Stone implement used for fish scaling found at the beach of Ivarinu.

PLATE III

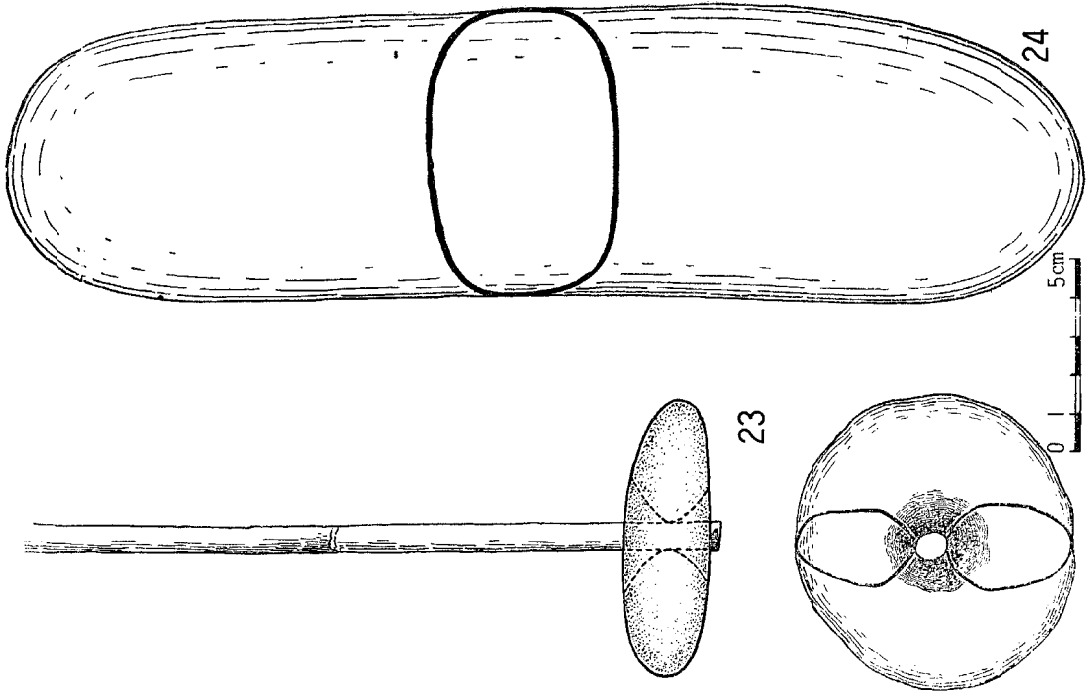


PLATE IV

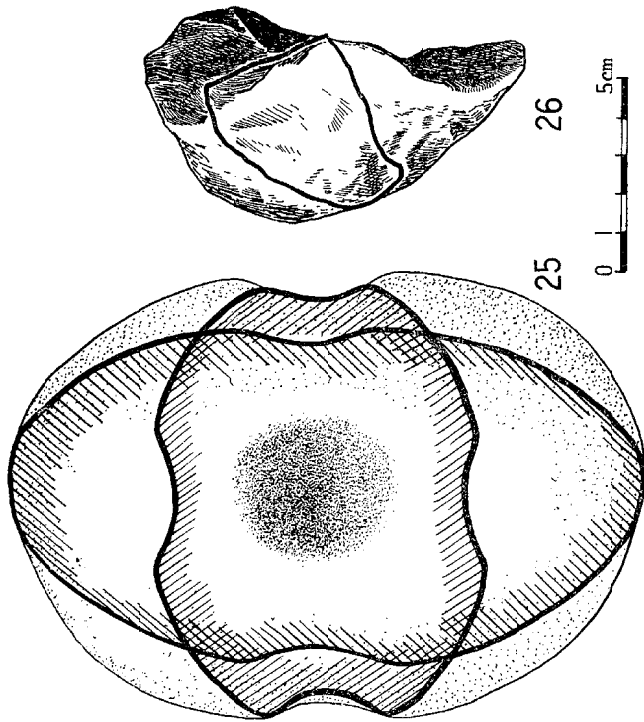


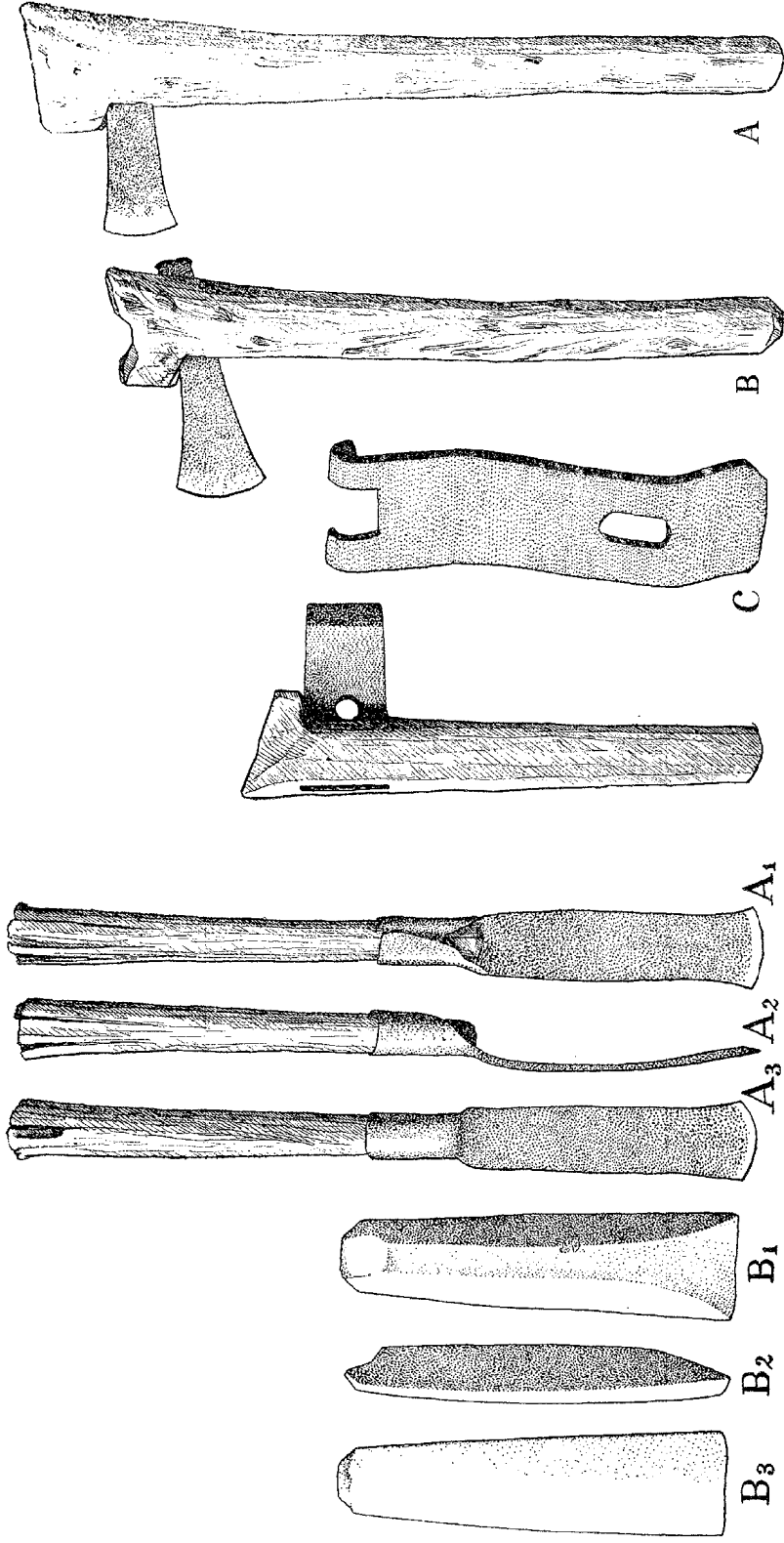
PLATE V

Fig. 1—A 1, A 2 & A 3. Showing the front, side, and back view of iron chisel called "Uma" which resembles in shape of the stone implement.
1—B 1, B 2 & B 3. Showing the front, side, and back view of a Roofed axe (Dachförmige Beil), which the Yami men call "Uma-no-Inapo" (chisel used by the ancestor), from the Wet field near Imurud village. Max Length : 22cm.

Fig. 2—A & B : Iron axes called "Wasai",

C—Right : Iron material preserved by a Yami man-collected from the Floatage in the War time.

C—Left: For iron "Wasai," pay heed to the rivet-hole left on the tool.



2

1